

くまがや風土記 7 奈良時代へと続く散歩道

方言研究家 篠田勝夫

会って見たかった人がいます。胸の奥でいつも気になっている人です。

といっても、初恋の人のことではありません。

昭和 25 年 3 月発行の『山形大学紀要（人文科学）第一号』に「埼玉県熊谷附近の方言に遺る二三の古語」という論文を載せた文理学部国語国文学研究室の田嶋福重さんのことです。今から 65 年前にこの論文を書いた人です。

当時 30 歳とすれば、今は 96 歳です。当時 50 歳とすれば 116 歳です。あの世でも会いたいものです。

この論文の中に熊谷の子供たちが蛍を呼ぶ唄が載っています。「ほたるこっこ、かなびらこっこ、夜は提灯たけ登り、朝は草場の露吸って行燈ばかりで飛んで来い」という唄です。そのすぐ後に「この唄は幼い頃大抵祖母などから教えられて意味も解らず唄っているのであるが・・・」と書かれていますから、この田嶋さんは、熊谷で生まれ、祖母の近くで幼年期を過ごした人だろうと勝手に推測しています。

論文が載った昭和 25 年は、まだ言葉が急速に変化していく前の時代です。つまり、まだまだ方言が無意識に話されていた時代です。標準語の普及に大きな影響を与えたテレビが普及し始めるのは昭和 28 年以降です。昭和 25 年と言うこの時代は、標準語と方言がまだ意識の中で分化しないで、混沌としていた時代です。熊谷地方の日常の言葉がまだ標準語に侵されていない時代です。

この時代に、熊谷で話されていた言葉を篩にかけて、方言を取り出し、それを学問的に分析した人が田嶋福重さんでした。

この論文の中では、「くんのむ（飲み込む）」「かつくらふ（威勢よく食べる）」「ゆひ（互いに手伝い合うこと）」「うむす（蒸す）」「蝶々べっこ（蝶々）」「やべ（来い、行こう）」「けなるい（羨ましい）」など、50 以上のさまざまな方言が扱われています。

こうした語の中から、奈良時代につながる語を含む「蝶々べっこ」について書いてみます。

私の父親は「ちょうちょべっこ」と言っていました。これは田嶋さんが書いている「蝶々べっこ」と同じです。「ちょうちょべっこが飛んでらあ」と口に出して言ってみると、父親の息遣いまで感じられます。8 年前に亡くなった父が蝶を見るたびに使っていました。「ちょうちょべっこ」は私の体に滲み込んでいます。

「ちょうちょ」は「蝶々」です。今の私たちにとっても標準語からそれほど離れているわけではありません。ここで問題なのは「べっこ」です。

また「蛍を呼ぶ唄」に出てくる「かなびらっこ」にも「びらこ」があります。

「こ」は「どじょっこ」「ふなっこ」の「こ」です。では、「べ」は？と首を傾げ、探りたくなります。

『日本語の系譜』（中本正智著／青土社）によれば、「べ」も「びら」も、奈良時代の「ヒヒル」につながる語です。この時代は、日本語の中で蛾と蝶の区別がなく、両方をさひて「ヒヒル」と言っていたようなのです。

脇道にそれて、この「ヒヒル」について触れます。この語は、熊谷の養蚕用語の中では、「ひーる」（繭からぬけ出てきた蛾を表す）という形で受け継がれてきました。養蚕農家が激減する昭和 50 年頃までは使われていました。

もとに戻ります。

『日本語の系譜』は、他の地方の方言も分析して、「ビラ、ブリ、ベ、ベラ」などをあげ、「すべて奈良時代のヒヒルにつながるものである。これらヒヒル系は蝶を表す列島の古い語であったと考えてよいだろう」と述べています。

熊谷で使われていた「ちょうちょべっこ」や「かなびらこ」は、奈良時代にまで遡ることができる「べ」や「びら」を含んでいたのです。

「ひーる」「ちょうちょべっこ」「かなびらこ」が使われなくなると、奈良時代へと遡ることができる語が熊谷方言から消えることになります。

熊谷方言の中には、奈良時代へと遡れる語が、他にもあります。「なびる（塗る）」「のたくる（ぬるぬる動く）」などです。

しかし、こうした言葉は次第につかわれなくなり、死語となっています。

一度消えた方言は二度と復活しません。死者と同じです。

生きて使われている方言に二度と会えないわけです。私たちは、「方言」というとんでもない貴重な宝物を、ポケットからぼろぼろ落とししながら、その大切さに気付かないで平然と道を歩いているのかもしれない。

（熊谷市公連だより 第 20 号 平成 27 年より）